

人形芝居當面の事

雑誌「演藝畫報」に、人形芝居の研究を特輯される計畫を聞いて、我事のやうに喜ばしく思つた。そして書けといふ渥美さんの手紙を得て、私は、常から考へてゐた「東風」の淨るりが、今日の人形芝居を支配してゐる——といふことをハッキリと記したかつた。即ち世間——筆持つ人々の間には、近松門左衛門を研究し、竹本義太夫を祖述するがために、「西風」の藝が、今日の人形芝居の根本をなしてゐるかのやうに考へられてゐるやうにしか、私の眼には映らない。ところが實はさにあらず、豊竹若太夫即ち後の豊竹越前少掾の流派が、今日の「義太夫節」の八分を占めてゐる。これが即ち「東風」の藝である。従つて豊竹座の作者であつた紀海音の研究が、今日では行届いてゐない。更に言葉を換へると、「西風」の作者であつた近松門左衛門の作品を、今一度組上に上げて、机の上の文學的研究でなく、院本の文字からでなく、耳から「淨るり節」として近松の作品の研究を、いろはから遣り直す必要があると思ふ。恐らく、今日いふが如く近松は、この標準から見ると、異つた價値が計量されて、紀海音の名聲が、今日よりも引上げられねばならぬ。従つて、「東風」の豊竹の流派が、今日よりもハッキリと、その功績と

價値とが計量されねば、不公平である。

この研究の一端として、私は紀海音——文學上でなく「淨るり作品」「語る作品」としての紀海音といふ豊竹座の作者について述べたいのだが、これはさして急がずとも、他の機會が、或は私に與へられるかとも考へた。

それよりも、演藝畫報、殊に安部豊さんの並々ならぬ努力で、昭和三年の暮に、東京で、「文樂座擁護會」といふものの發會式があつたことを、折柄上京中私は聞いた。そして二三氏によつてその内容を聽いて、とにかく、今日瀕死の状態にある人形芝居に關して、この力強い後援の聲を聞くことを、旅にゐて涙ぐまじき感謝の意を、私が大阪人であるが故に、まづ致したのである。

が、考へてみると、文樂座の現状が、現在のありのまゝを、まだ世間では知らない、裏を知らない、人形芝居衰微の眞因を知らないで、應病與藥の道が立たうとは思へない。或は人形芝居は、老衰病に罹つてゐるのだから、耆婆でも扁鵲でも、匙を投げようといふ人があるかも知れないが、假令老衰病にしても、手當の如何によつては、尙回春の見込が樹たないとも限らぬ。が、老衰病にしてからが、腎臟が悪いのか、腸か胃か、心臟かによつて與藥の道は異ならうぢやあるまいか、この病原の檢討を怠り、病原に誤診があつては折角の手當も徒勞に終はらう。私は却つて擁護が害を爲す場合がないとも限らぬ。

私の心配はこゝにある。よつて、私は大阪に住つて日々人形芝居を診察してゐる一田舎の庸醫だが、診察をしつゞけてゐる。こゝ二十年近く、人形芝居の病體を、高名なる博士諸士よりは診察してゐる度數が多いといふ點を以て、私の診察簿を、こゝに展開したい。應病與藥の方法は博士達にお任せしよう。

ところで、私は、今日の人形芝居が、何故衰微し、保護を要するかといふ點を、三方面から見たい。異つた三つの窓から、人形芝居の今日の衰微し老衰した現狀を覗いて、述べたいのである。

第一は「時代」である、「時世」である「時の流れ」である。今日の看客が、今日の大衆は、もう淨るりの音階、淨るりの旋律とは異つた洋樂の旋律、洋樂の音階によつて、幼稚園なり、小學校から養はれて来た。その耳は、淨るりの旋律を聽くことは、却つて外國の音樂を聽くが如くであらう。この若い人達を、淨るりにつれて、動作をする人形芝居に引付けておかうといふこと、それ自體が既に無理である。この意味において「人形芝居」は、明かに過去の物である。——内容の如何を論じ云爲する前に、既に人形芝居は、音律において過去のものである。過去の藝術、古典藝術を味ふには、それ／＼の準備と豫備知識とを要する。豫備知識を具備して聽き、且つ見ねばならぬ舞臺藝術は、今日の大衆の相手ではな

い。今日に生命のないものが、いかに最眞目に見ても、興行の對象とはならないことは明かだ。

この興行の對象とならない、大衆に賣物にならないものを、無理に賣付けようとするのが、今日の文樂座の有様である。これで興行の不振を嘆くのは、痴人の愚痴だと私はいひたい。

こゝにおいて、大阪における近松の研究者木谷蓬吟氏の如きは、今日の人形芝居に、新作淨るりを可能として、今日歌舞伎に見る、新歌舞伎程度、即ち岡本綺堂氏の新作を、左團次一派が演ずる程度までの、「新しき淨るり」を可能とし、これによつて「人形芝居」を今日の大衆に押賣りをしようとする意見を持つてゐる。

が、私は、これには全然反對の意見を持つてゐる。歌舞伎の舞臺における新歌舞伎が可能であるからといふ理由で、新作淨るりの可能は認めることが出来ない。その理由の一つは、能と並稱される人形芝居の古典味を、變質してまで、興行の對象とすることは藝術上から見て大きな損失である。よし新作淨るりが可能としてもだ。

まして新作淨るりは可能にしても、この曲節の新作は、斷じて不可能だ。誰れが節付をするか、今日の淨曲界に曲りなりにも節付をする誰れが居るか——と問ひたい。恐らく二代豊澤團平の歿後、唯一人の節付者をも見出すことが出来まい。

こゝにおいて、人形芝居は、特殊なる階級、この古典を味ふ準備知識を具ふる一種の階級を對象として、變質を絶對に避けて、保存の方法を講ぜねばならぬ。——この日本の、或は唯一の古典藝術である人形淨るりの保存を無用とするものはなからうと思ふから、それには、こゝでは觸れまい。

第二の病原は、幕内の各業者にある。各業者とは、申すまでもない太夫、三味線、人形遣ひをいふのである。

竹本豊竹兩座の對立した昔から、明治期に入つて、文樂座、彦六座が對立したついでこの程までは、名人もゐた、やかましい師匠もゐたから、斯道の秩序、稽古の厳格なことは、敬虔な念を以て見ねばならぬほどのものであつたが、この頃の文樂座の幕内は、その空氣が弛緩し切つてゐる。下、上を剋する氣運は、人並にこゝの樂屋にも澎湃として、時の浪が押し寄せてゐるのである。一例をいふと、昔ならば師匠は、この道の常として、決して稽古はしてくれない、師匠のうちにて、雑用に使用さるゝ傍ら、少しでも師匠の藝談に耳を藉し、師匠が床に登れば、上のみす内なり、衝立のうしろで、一語も漏らさじと、その藝に聴くものゝ多くを見た。例へば先代大隅太夫の如きは、貧乏で貧乏で、けふの炊ぐ米さへもない。その妻女が米を要求すると、それどころか俺れは稽古が忙しいと云つて家を飛出したといふ逸話がある位、大隅太夫は、火の出るやうな稽古を團平師匠に受けた。そのみならず大隅太夫は、ど

んな身分の下の太夫にでも、素人の人々にても、どこか一ヶ所はいゝところがあるといふ理由で、自分の弟子にまで、そのいゝところの一語、一くさりの節さへも、弟子からでも稽古を受けた人である。一面からいへば大隅太夫は、貧乏で家に居られなかつたから、どこ、誰の區別もなく稽古に、貧乏を忘れるようと努めた事が、彼の藝を上達せしめた人である。

が、今日の若い人達——太夫に限らぬ。三味線でも、人形でも、師匠からさあ稽古をしてやらうといつても、いざといふ間際には、一寸用事が出来ましたからと師匠の家へ電話で断りをいほうといふ状態である。これは、文樂座の三味線の紋下鶴澤友次郎の慨嘆談だが、文樂座の三業の樂屋を擧げてこの有様だ。「藝に對する熱」がない。それで一人前の不平と不満とは口に絶やさないのである。

又今日の上に立つてゐる、紋下竹本津太夫を初め、生活の安定を松竹によつて保證されてゐる人達は功成り名遂げて、一服、と小休みの態で、何等の藝に對して向上の念がない。——私はこれを敢えて斷言する。舞臺は戰場です、死ぬまで稽古です——とは彼らのいふ口癖であるが、これは亡き名人たちの口癖、名人の言葉を、伊勢の鸚鵡岩のやうに、精神も魂もなく繰返へすばかりの言葉である。舞臺を戰場にした實を見ない。死ぬまで稽古であるといふ實例に、私は、寡聞にして接したことがない。加ふるに、「功成り名遂げ」といふのも程度問題で、今日どれほどの名人は愚か、上手がゐるか、或は誰の何と

いふ聞きものがあるか、文樂座の連中に尋ねたい。太夫のことばかりをいふやうだが、三味線も、人形も同じである。藝に熱がなく、向上の一念が夥しく、驚くべく缺けてゐる。

昭和三年の暮、丁度「演藝畫報」の安部さんなどの努力で擁護會の發會式のあつた日に、折柄上京中の私は新橋演舞場に、文樂座出開帳の舞臺を見ようと出かけた。その折都新聞の平山蘆江氏が、大阪では文樂座へ何ぜ人が來ないのかといつた。私は言下に「今の文樂は下手くそだから入らないのが定だ」——といふと人の善い蘆江氏は、そんなことはない、昔の役者がうまかつたやうにいふのが人情だ、文樂でも鏗太夫の如き立派なものだ、大阪人は下手だと思ふから下手なのだ、もつと育ててやらねばならぬ——といつた。常は争鬭心の多い私だが、この問題に觸れると一日お喋りをして盡きないから、私はいつになく、話を淨るりから打切つたのである。私の争鬭心が満足しなかつた故か、この事が年を越えて、正月の餅とともに腹に溜つてゐるやうに覺えてならなかつたが、正月の五日に大阪朝日新聞の夕刊に出てゐる、大谷句佛師の「斷想録」を見ると、能樂の危機を論じて、維新當時の能樂の危機は、外面的危機であつた。今直面して再度の危機は、内面的危機であると斷じ、維新の危機は當時の社會相であつた歐化主義が能樂に影響しようとした事であるといひ、目下の危機は、(第一)能太夫の藝術的信念の缺乏、研究に眞剣味の絶無。(第二)には、能太夫が早く大家名家となり、宗家といへば藝の上の達

人であるかの如く自他共に考へ、未熟の太夫の絶句に意義を附して禮讚する。そしてこの第二の原因の原因は能樂鑑賞者に何らの豫備知識のないことである。——「たゞ浮調子な技巧を弄してゐさへすれば大向ふはやんやと喝采する」と、句佛師は喝破してゐる。私は、能樂について語るべき何等の資格がないが、句佛師の言葉を、そのまゝ、我が「人形淨るり」に當てはむることが出来ることを悲しむものである。しかし、人形淨るりにあつては、句佛師の所謂、維新當時の外面的危機も、目下の内面的危機も同時に、我が人形淨るりを、今や刻々に襲ひつゝあるのだ。黙して止むべきでない理由が、こゝに嚴存するのである。又この第二の原因を、蘆江氏或は東京の徒らなる、豫備知識の不足せる鑑賞者である文樂禮讚黨に、句佛師の言葉そのまゝを提供したい。

私は、別項において、東京における文樂禮讚がますますその業者の精進の心を消磨し、徒らに人氣の末にのみ走らんとすることを述べたが、句佛師は、同じ理由の許に同じ結果を慨してゐられる。或は能樂の危機も人形淨るりの危機も、同じ轍を奔つてゐるらしい。

私は、大阪における文樂座の實情、——私の目撃したところを今一つ述べてみよう。古來その書卸しの寛延年間から、歌舞伎でも淨るりでも、「忠臣藏」は獨參湯の名を取つてゐる人氣のある狂言である。

わけて淨るりにあつては、例の「九段目」といふ、三百年間に出来た淨曲中でも最上の「九段目」といふ重い一段のある「忠臣藏」は、流石に文樂座でもはげれたことのない狂言だが、昭和三年の六月にこの獨參湯の「忠臣藏」が出た時、途中から紋下津太夫が休場したといふ理由もあるが、獨參湯が十八日しか、興行が出来なかつたといふ前代未聞の事象がある。この時に私はつくづく人形淨るりは、もう興行にはなるまいかと暗い心持がした。

この時の事である。紋下太夫の語るべき、「九段目」を竹本駒太夫が代役してゐた。この時の客の歸りを、私は木戸口に腕を拱いて、ちつと、歸る客の様子を見てゐた、これが昔の攝津大掾か、次の三代越路太夫であつたらば、客は黙つては歸るまい。必ずや半札或は丸札を木戸口で請求したらう。半札といふのは、他日本太夫が出た時に半額の木戸で入場する特權札である。丸札とは、同じく他日入場する全額の特權札である。しかるに紋下の津太夫が休んでゐる。しかも淨るり中の淨るりである「九段目」が語り場であるが、私が木戸で腕を拱いてゐると、この日のお客百人餘りは、おとなしくスゴくと、何の感興も保持せずに歸路に就いた。唯の一人も、苦情を私語してゐる人もなかつた。唯一人「駒はんもなかく語るな」と話合つてゐた客を見つけただけであつた。

これは何を語るか、紋下太夫の權威のないことを如實に見せてゐる悲しむべき一事象だ。私は再び暗

い心持を抱いて、辨天座(文樂座焼失後の假劇場)を出た。

津太夫ばかりを例に引くやうで、個人としては氣の毒だが、善惡ともに「紋下」は、その責があるから、紋下の津太夫を、私は例に引ばり出すのだが、この權威のない事象を、まぎ／＼と見せ付けられた紋下津太夫が、何としても矢張り、現在の文樂座では第一の太夫である。土佐太夫の技巧、古靱の細心はあつても、引くるめて、つかみどりに一言で評すれば津太夫は、やつぱり紋下の太夫、第一の現在での大きい淨るりを聽かす太夫であることは争はれない。その紋下がこれだ、自餘の人々、餘子碌々推すべしである。

「丸札」の一例ではこんながある。文樂が松島へ引かれた當時、攝津、當時は二代目の越路太夫の人氣は素晴らしいものであつた。この越路が「十種香」で休場した時に見物は承知しない。文樂座の木戸口を去らうとしないで、「丸札」の請求が厳しいので、座方もこれに應じた。その時に、爾餘の太夫―しかも越路の先輩である春太夫、津太夫の如きは、「越路が休んで丸札が出るなら俺たちは只やがな」と嘆じたといふ越路一代の名譽の逸話がある。

更らにこれを、私は興行師の側から見ると、松竹は文樂座を荷厄介にして、しかもさうでない顔をし

てゐねばならぬ立場にある。松竹は營利の會社だ。營利を目的とする會社である以上、算盤をはじいては、文樂座の焼失した今日、道頓堀の大劇場で、月々の興行は困難であることは察する。かゝりの多くかゝる大劇場で、人疎な收容客の常打は困難であらう。又さりとて、昔は一敵國であつた近松座は買ふ契約は濟んだが、新築には、營利會社であるから採算が立たねばならぬ。この點に久しく行惱んで、最近いよ／＼、ホントにいよ／＼新築することとなつたと傳へる。

新築するのは結構だが、興行主に「人形芝居」に對する愛着、「人形淨るり」に對する營利以外の執着——「愛する心」のないことを、私は遺憾とする。

仄聞するところに據ると、兒玉吞象といふ將來を卦に觀する種類の人間の勧めによつて、近松座の新築を決心したのが事實だといふ。新築するならば、動機は何んどでもいゝぢやないかといふかも知らぬが、私はさうは思はぬ。合理の上に立たずに、傳ふるが如く「卦」によつて、「人形芝居」の重大なる將來を定むるといふことは極めて不安を意味する。この事あつて、淨るり好きとかの大府知事力石雄三郎氏と兒玉吞象とを、一夕招いて、紋下津太夫の「日向島」をお聴きに達したといふ話。これは私の新聞記者眼に映じた宗街大和屋における師走の一宵であるが、この主客の取合せによつて、傳ふる處の眞であるらしいことを推斷してもいゝと思ふ。

大阪の松竹は、文樂座——を故植村文樂軒の嗣子から、南部太夫の口つきによつて、二萬圓で文樂座の盡くを買つた松竹は、腹のうちでは荷厄介であらうが、どうすることも出来ない。これを捨てんか松竹の高等政策として不利を來すことは、何かの時は松竹は、文樂座を營利を離れて興行してゐるといふ事を一種の誇りとして、外客の遊覽その他に見せてゐるのでも判る。それゾルフ大使だ、やれ佛蘭西の文藝大使だと、松竹の御自慢に見せるものは、この文樂座だ。

然らばこの古典に對する、保護費維持費としての損失は當然の負擔だとも考へられるのだが、松竹には「人形淨るりを愛する心」が缺乏してゐる。だから、この一點になると、「營利會社である」といふ一念が頭を鋭く擡げるらしい。一例をいへば、越路太夫歿後、松竹の主腦者白井松次郎氏は、文樂座の總稽古を唯の一度も見たことも聞いたこともない。白井氏は天下の興行師、一文樂座の總稽古を見るには餘り多忙であるかも知れない。然らば文樂座の主任？ 或は松竹を代表する人が、その總稽古に立合つてこそその總稽古だ——と文樂座の人々は異口同音に不親切を語つてゐる。

それには理由のあることで、元の座主、先々代の文樂座は、主人夫婦が淨るりを眞の友としたから、總稽古には土間の中央に文樂軒夫妻が赤毛氈を敷いて陣取り、妻女は主として着付の良否を受持つて、熱心に總稽古を見た。そして、文樂軒の曰くには、「十分に稽古をしないでお客様に見せる事は、己れ

の賣品をまづくしてお客に食はずやうなものだ」と、常にいつてゐるのが口癖であつた。この文樂軒の傘下にあつた文樂座の人々は、總稽古に興行主のゐないことを、どれほどたよりなく思つてゐるかも知れない。これは尤もな人情だ。

前に引いた句佛師の「斷想私録」にかういふことも書いてある。――

「予が師匠在世中囃子方が無意識に發した言葉に室町の舞臺(金剛)で演奏する一曲は丸太町の舞臺(觀世)の四曲よりも疲れる」

と。これ、金剛の師匠の耳を恐れたのである。人間の弱さ淺ましきはこゝだ。幾色もの糸を、一手に綜ぶる文樂軒夫妻の耳を、たよりにした文樂の人達は、そこに「愛」と「親和」を感じもしたらう、藝の目標とも見たらう、一事は萬事である。松竹の主腦者には誰れがどんな太夫で、誰れがどんな三味線か己が使つてゐる藝人の――しかもこの特殊な古典藝術の藝は知るまい。無知に「愛」の生ずる試しがない。

そして白井松次郎氏は、文樂座の經營に對して二つの標準を持つてゐるらしい。即ち

一、ピラの利く狂言を選ぶこと。

二、組の出来る藝人を優遇すること。

この二つの標準は、尤もな標準だが——營利會社として——しかあるべき事だらうが、第一の「ピラの利く」事を、多年唯一の方針としたがために、ます／＼出し物の範圍が狭くなつた事(一)。「ピラの利く」といふ事が唯一であるがために、太夫人形各自にその個性を無視し、太夫の口も知らずして、語り場を配役するために有望の太夫をも殺して使つてゐる(二)。そして、いつも「堀川」「酒屋」「合邦」「壺坂」が出るといふ結果を來たし、お客は又かと、飽き／＼して興行毎に新味を感じなくなつた。太夫の語り口を知らずに、太夫を殺してゐる。例へば今の太夫がその犠牲の一人である。

「ピラの利く」といふは、お客が知つてゐるもの、お客の耳にある淨るりをいふのである。「二」の組の出来ることが標準であるから稽古より連中の驅集めに狂奔することは自然の道理。藝よりも頭數本位といふ事になる。その極は、一例が、素人から飛出した竹本貴鳳太夫の如きが、二興行で四千人の組見を好餌に商賣太夫となつた。——あの藝で商賣人になつたのだ、その結果は、どういふ事になるかといふと、さらでだに場割に困るに拘らず、四千人の連中に釣られた松竹は、下手な端場語りの貴鳳太夫の爲めに又幾分かの時間を浪費してゐる。そして若い連中が、一興行中八日目七日目の出演といふ日替りのために、稽古にも拔擢にもならないめ、じろ押の太夫三味線が、池古に浮ぶあか子のやうにうちやくしてゐる。

この中へ更らに東京から、朝太夫といふ太夫を加入させて、又場割りに困つてゐる。朝太夫を冷遇したとか、何とかいつて、東京の或一部では不満があつたといふ消息を聞いたが、だから私は高唱するのだ。關東の耳は、朝太夫の如き淨るりを、淨るりと思つゐる。その耳は椎茸だ、くらげだといふのだ。我々は朝太夫の淨るりの如きを、號して乞食節といふ。我々の眼から見ると、朝太夫輩を、あの淨るりを、(私は個人を攻撃するのではない。その淨るりをいふのである)文樂は優遇しすぎたといひたい。

斯くして松竹では、枯木も山の賑ひだといつてゐるが、要は組見の吸收にあるのである。且つ朝太夫は、中村雁治郎の父甕雀の男衆の甥といふので、成駒屋のお聲が、りりが、朝太夫をして、文樂の人たらしめた。そしてますます、新進新手の道を塞ぎつゝあるのだ。かくして人形芝居の隆盛をまつといふことは、田圃を荒しまはして多收穫の肥つた米を望んでゐるやうなものだ。

松竹では、何んとしても一個の天才が生れねば人形淨るりは立行かないと斷言してゐるが、天才の芽生でも、踏にじつては生長のしようがないといふのが、私のいふところだ。

唯人形芝居に對して松竹の功罪を論ずるならば、小興行師の手にあつたらば、或は離散してゐるかも知れぬものを、一手にしつかりと纏つてゐることは、何としても松竹の功として讃ふべき一事である。

藝人の給金に對しては、野暮なことを、私はいふ事を避けたいが、近時ふとした不思議なる順序で、大阪の三四優人の給金を的確に知り得たと共に、「人形芝居」の旅興行の「古來の給金制度」について、序でに述べておきたい。

何故こんな事を、私がふといふかといふと、東京における「文樂擁護會」の第一次の事業は、文樂座の東京興行の度に、有識者の組見を催ほす事であるさうな、これは私も大いに賛成する。即ち一人でも多くの見物が、人形芝居に集つて、その内の幾人でもが、人形芝居の愛好者となることを望むからである。

ところで、第二次の事業として幾何かの寄附金を募集して、その利子を以つて、「人形遣ひ」の生活を補助するといふ案があると仄聞するが、これが事實ならば、飛んでもない間違つた擁護方法である。

これを理論上より見ると、「人形遣ひ」とても、一營利會社の使用人である、それが生活に困るならばその營利會社が、己が使用人の生活の出来るやうに給與することは、當然の義務であつて、他人の容喙すべき事項ではない。まして、松竹といふ營利會社が、その高等政策の上から見ても、國寶視してゐる「人形遣ひ」に他人が、飯を給與すべき必要も、筋合ひもない。——これは理論一片の一應の話であるが、現在の文樂座における「人形遣ひ」は總勢二十七人で、このうち一人でも缺けると、直ちに舞臺に

差支へるといふ程度まで切詰めてゐる。そして報はるゝことの薄いのも事實であるが、茲に一考を要すべきは、由來謂ふところの「藝人氣質」について一考も二考も要する。文樂座の幕内は、太夫、三味線人形の三業が、舞臺でイキのピツタリと合ふやうには、その日常生活——裏舞臺では合つてゐない。こゝが「藝人氣質」で、人形に厚く報ひようとする實行案が成立すると假定すると、この三業の間は、現在以上に圓滿に事が運ばない。文樂座幕内の不統一、意氣の一致を見ないことも、今日の衰運の一つの遠因であることを思へば、人形造ひの優遇養成の道は、ベタ付の仄聞するが如きでなく行はねば、飛んだ不測の禍が、却つて茲から生ずると思ふ。

昔の文樂座なり、彦六座の旅興行の制度を考へると——私は實に今取調べてゐる「團平傳」の材料にとて、團平及び妻女ちか女の書捨てた反古を大の柳行李に三杯がものを、今一々に取調べてゐるが、このちか女の日記、小遣帳を見て的確に判つたのであるが——昔の人形淨るり座は、大阪の本場の給金は極めて安い、お話にならぬほど安いが、その代り旅は盡く解放して、いろ／＼の契約方法があるが、片迎ひ給金幾何とか、いろ／＼だが、その給金は大阪の約三倍、或は四倍、五倍となつてゐる。だから、昔は——少くとも團平時代はその業者の懐ろは、大阪の本場と旅とで平均がとれて、旅興行は收入を計る唯一の方法であつた。

この方法が、松竹が文樂座を經營しても傳承されてゐたのであつたさうだが、即ち大阪の文樂座の給金よりも東京は五倍、——これを五杯はといつてゐるので、滞在の祝儀、不祝儀、最良先の土産も、この五杯が物をいつたし、又都會地の旅を藝人も喜んだのが、昭和三年の東京行を境として、文樂座の給金は、東京で大阪の一杯半と減額されてしまつた。即ち大阪における——俳優などに比較していふに足らぬ文樂座の給料の五割増が東京の旅であるといふ事になつた。五倍が五割になつたのである。これが彼等文樂座蓮中の懐合の實情だ。

即ち昔、藝人がイキをした旅興行の奥の手を、今日では松竹自らその穴を拾ひ、大阪での文樂興行の損失を旅で採算をとつてゐるといふ勘定になるのである。それでも藝人は、弱い。他に人形淨るり座がないから、文樂座が唯一であるから、これに不服ならば自ら追ん出ねばならぬ。文樂座を出れば稽古屋である。擁護する側の考ふべきはこゝである。

私は文樂座が——人形淨るりが、今にも潰れさうに述べて來たが「變質された人形淨るり」は、私どもが「保存」しようとする目的物ではない。又淨るりは決して滅亡せない、昔から盛衰はあつたといふ人や、堅くなつてゐる太夫もある。それは事實であらうが、「興行」としての人形淨るりの滅亡は、この

道の滅亡であることを知らねばならぬ。又太夫、三味線は、人形はとにかく、淨るりは決して滅亡しないと高唱してゐる人もある。大阪だけでも約十萬の素人義太夫があるのだから。それも事實だが、人形から離れた淨るりは、もう滅亡を意味してゐる。太夫、三味線、人形は三輪車のやうなものだ、一つを缺いても片輪である。そして三業は同等の位置と同等の権利とを保持せねばならぬ。

然らばお前は、どうしてこの人形淨るりを保存しようといふかと、私に尋ねられたらば、私は一私案があるが、略ぼ讀者は、私の意のある處は分らうが、これを説明するには、今までの紙數の二倍を要しても足るまい。私は或時期において、或は實行において、讀者に見ゆる目のあることを信じ、且つ祈つておく。

この稿は現在の事を露骨に認めたがために、人によつてはお氣に召さぬ筋合もあるかも知れぬ。あらば教へてほしい。そして私も腹に入らぬ處がある時は、幾度でも實例について更らに述べたい事が多いのである。(昭和四年一月)